

中学校 社会科 部会

部会長名 福智町立赤池中学校 校長 荒尾 和幸

実践者名 糸田町立糸田中学校 教諭 入江 和希

1 研究主題

「生きる力」を育む学習指導の研究
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

知識基盤社会といわれる現代であるが、近年顕著となっているのは、知識・情報・技術をめぐる変化の速さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会変化が予測を超えて進展するようになってきていることである。子どもたちには、このような予測困難な社会を生きるために必要な力である「生きる力」を育成することがより一層求められている。

このような状況を踏まえ、中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）では、今後、子どもたちに育成すべき資質・能力は、①生きて働く「知識・技能」、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」としてしている。また、学校においてこれらの資質・能力を育むためには「社会に開かれた教育課程」の理念に立脚した組織運営の改善と授業改善を図ることが重要であるとし、改善の視点として「カリキュラム・マネジメント」と「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善を提起している。

中央教育審議会答申を踏まえ、平成 29 年告示学習指導要領では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫等を引き出していくことができるようにするために、全ての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理された。

また、「どのように学ぶか」について、教育課程編成・実施の在り方（カリキュラム・マネジメント）や子どもの主体的、対話的で深い学びを実現するための配慮事項が示されている。現在、各学校では、学習指導要領で示された内容等をもとに授業改善が進められている。

以上のことから、平成 29 年告示学習指導要領の全面実施を踏まえ、本主題を掲げた実践研究を行うことは、田川郡全体の学校教育の充実を図る上で大変意義深いと考える。

(2) 生徒の実態から

田川郡は 7 町村で成り立っており、中学校 7 校、義務教育学校 2 校がある。旧産炭地域であり、主な産業等も乏しく、人口減少や生活保護率の増加等、多くの課題を抱えている。

そんな児童生徒を取り巻く環境でも、携帯電話やスマートフォンの所持率は、学年

が上がるごとに高くなり、このことが基本的な生活習慣の定着や健康面にも影響を及ぼしている。

本郡の学校教育においては、子どもたちの学力の向上が大きな課題とされて久しい。全国学力・学習状況調査や福岡県学力調査の結果によると、全国・県の平均正答率、さらには筑豊地区の平均正答率よりも低い学校が多く存在する。特に思考力・判断力・表現力を問う問題のポイント差は大きい。

各学校における実践においては「書く活動」や交流活動、自分の考えを発表する場の設定などの活動を設定した実践は増えてきているものの、活動そのものが目的になっている場合も少なからず見られ、児童生徒に確かな学力をつけることに必ずしもつながっていないと考えられる。

こうした状況をふまえ、本研究においては、活動そのものを目的とするのではなく、活動の中で「何を学び」「何ができるようになるのか」を児童生徒に実感させるとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現することで「生きる力」を育むことにつながるものと考えた。

3 主題の意味

- (1) 「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。
- (2) 「対話的な学び」とは、子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。
- (3) 「深い学び」とは、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。
- (4) 「主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善」とは、上記の3つの学びの視点から学習過程の質的改善を行うことであり、そのことを通して「生きて働く知識・技術の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」を育成するものである。

4 研究の目標

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追求したり解決したりする活動を通して「主体的・対話的で深い学びの実現」を図る。

5 研究仮説

学習過程において、次のような手立てを取れば「主体的・対話的で深い学びの実現」につながるであろう。

仮説Ⅰ 複数の資料をもとに、自分の考えをまとめ、記述する活動に取り組みさせる。

仮説Ⅱ 他者との意見交流を通して、自分の考えを再構築させる活動に取り組みさせる。

6 研究の計画(授業の計画)

(1) 単元(題材等)「現代の民主政治」

(2) 単元(題材等)の目標及び指導計画

単元	現代の民主政治		総時数	7時間	時期	9月
単元の目標	<p>○民主政治における基本的なしくみや選挙の基本原則、選挙制度、政党政治の特徴を理解することができる。(知識・理解)</p> <p>○投票率や世代間の政治参加の実態、他国の選挙に関するデータなどの資料を適切に選択し、読み取ったことを活用することができる。(知識・技能)</p> <p>○国民の政治参加によって、民主政治が運営されていることに気付き、投票義務化の是非について、他国との比較や交流活動を通して多面的・多角的に考え、自分の考えを表現することができる。(思考・判断・表現)</p> <p>○主権者として主体的に政治に参画しようとする態度を養うことができる。(主体的に学ぶ態度)</p>					
次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(働・効)		
1	1	○単元の課題を設定し、今後の学習過程に見通しをもつことができる。	○国政選挙の投票率から、自分たちの選挙への意識とのギャップに疑問をもち、単元の課題を設定する。	○政治意識の感覚を問題意識をもたせる。 仮説 I		
		○様々な資料から、「投票を義務化すべきか」自らの言葉で表現することができる。	○投票義務化に関する新聞記事や海外の事例などの複数の資料から、「投票を義務化すべきか」自分の言葉で表現する。			
2	1	○民主主義における意思決定のしくみを理解することができる。	○選挙の基本原則や多数決の原理などを教科書やICTを活用してまとめる。	○なぜ選挙が必要なのかを考えさせるため、歴史の学習を振り返らせる。		
	1	○日本の選挙制度および一票の格差について理解することができる。	○日本の選挙制度および一票の格差について教科書やICTを活用してまとめる。	○日本の選挙制度の問題を考えさせるため、「公正」などの視点から考えさせる。		
	1	○政党やマスメディアの役割を理解することができる。	○政党やマスメディアの役割などを教科書やICTを活用してまとめる。	○実際の投票をイメージさせるために、政党の政権公約を比較させる。		
3	1	○投票率を上げるための国内外の取り組みについて理解している。	○ICTを活用し、投票率を上げるための国内外の取り組みを調べる。	○生徒の考えが揺れ動くよう、問い返しや価値づけを行い、思考の再構成を促す。		

			仮説Ⅱ	
4	1	○日本で選挙を義務化すべきかどうかについて、意見交流し、再考する。	○是非の立場を明確にして、意見交流し、自らの言葉でまとめる。	○他国の事例や「効率」「公正」などを根拠に意見をまとめさせる。
5	1	○投票を義務化しない日本において、よりよい社会の実現のために大切なことを自らの言葉で表現する。	○マスメディアと政治の関わりや他国の主権者教育などの資料から、今後どのように政治と関わっていくかを考える。	○政治意識を高めるため、レポートや振り返りの内容から価値づけする。

7 指導の実際

(1) 仮説Ⅰについて

単元の導入段階では、国政選挙の投票率に関する新聞記事や事前アンケート結果を提示し、生徒自身の選挙への意識と社会の現状との間にあるギャップを意識させた。そのうえで「投票率を上げるためにはどうすべきか」と問いかけたところ、どの学級でも「選挙を強制にすべきだ」という意見が出された。



【写真1】授業の様子

そこで、生徒から生まれた疑問を起点として、単元の学習課題を設定した。さらに、義務投票制を採用している国や高い投票率を示す国の資料を提示し、初期の意見を個人で整理させた。その際、今後学習してみたいことや新たに生じた疑問を明確化させ、単元学習の見通しを持たせた。

(2) 仮説Ⅱについて

第4次の学習では、それまでに得た知識を活用し、再度「投票を義務化すべきかどうか」という課題に向き合わせた。まず、初期段階での義務化の是非を提示し、同じ立場や異なる立場の生徒同士で意見を交流した。また、学習を通じて立場が変化した生徒については、その変化の理由や思考の過程を共有させた。



【写真2】授業の様子

その後、交流をふまえて、自分の考えを改めて自分の言葉で説明するよう促した。

8 成果と今後の課題

(1) 糸田中学校の取組について

① 3年生アンケート調査（対象：60名）

アンケート項目	単元前 (%)	単元後 (%)
ア 「何をするのか」「何を学ぶのか」「何が大切か」などの見通しをもって取り組んでいるか	92	100
イ 学習したことを振り返り「次は～しよう」「～を学びたい」と考えることはありますか	82	91
ウ 学習内容について、友人と話し合う中で「そんな考えもあるんだ」と思うことがありますか	90	96
エ 学習内容について、保護者の方や周囲の人と会話をする中で、「そんな考えもあるんだ」と思うことがありますか	85	81
オ ニュースやSNSなどを見て、「授業で学習したことと関係あるな」と思うことはありますか	85	92
カ ニュースやSNSなどを見て、「授業で学習したことと関係あるな」と思って、自分の意見やアイデアを考えることがありますか	92	78

② 生徒の記述

ア 「主体的な学び」に関して	
まずは日本の政治の仕組みや選挙の制度について知りたい	他の国の制度や、実際に義務化した事例について知りたい。
イ 「対話的な学び」に関して	
・他国では投票率を上げる他に国民の政治的な無関心を解消して多様な意見を反映させる為に義務化している事が分かりました。 ・義務化すべきだと思ったけど義務化のデメリットを聞くと強制的に何も考えず周りに流されて投票する人が出てくるデメリットがあるのを聞いて義務化するのもいいことばかりじゃないんだと分かりました。	ゆきちゃん（高齢者の投票が多いと高齢者に向けた政策が多くなる。例えば年金を増やす）という意見で、自分とは反対の意見だったけど、（あ、たしかにそうだな）と納得しました。
ウ 「深い学び」に関して（ある生徒の変容に着目して）	
① 単元のはじめ 義務化すべきではない。 →「政治に興味がない人が深く考えずに投票することになるから。」	
② 展開の中での振り返り	
選挙を義務化することで若い時から、政治教育が高まり、意識も高まるメリットがあったり、逆に、義務化することで、白紙投票が増えたり、適当になったり、自由という権利、平等が奪われてしまうというデメリットもありとても難しかったです。	選挙の投票率を上げるためだけだったら選挙の義務化は正しいと思う。だけど日本の選挙の問題は投票率じゃなくて政治への関心の無さだと思うから義務化よりも関心を上げることを目指したほうがいいと思った。

③ 第4次の再構築の場面

「義務化すべきではないと思う。」→「義務化している国での白紙や無効票の増加から」
 「義務化に伴うコストの面から」
 「法改正の必要性や人権とのかかわりから」

はじめは一つの理由に基づいた意見であったが、学習を経て多角的な観点から論じられるようになった。また、「投票率を上げること自体に価値があるのか」という新たな疑問を持ち、他国の政策の変化を調べる姿も見られた。その結果、義務化の是非よりも、投票率を高めるための工夫や自分自身の政治的関心を高めることの重要性へと、学習の焦点が広がっていった。

③政治への意識の高まり（回答 62 人）

	肯定的な回答(人)	否定的な回答(人)
政治（選挙など）に興味・関心は高まりましたか	49	13
18歳になって、選挙に行こうと考えていますか	52	10
ニュースや新聞、SNS等で政治の内容について見ようと思いますか	48	14
政治に関する内容を誰かと話す機会は増えましたか	友達(18)・先生(5) 保護者(21)・地域の人(2)	

④考察

糸田中学校アンケート調査ア・イの項目の変容や生徒の記述アから、授業の流れや学習目標を意識しながら活動に取り組んでいることがわかった。また、アンケート調査ウ・生徒の記述イから、他者との交流を通して新たな考えに気付いたり、自分の考えをより妥当なものへと発展させたりしていることが確認できた。さらに、生徒の記述ウの様子から、「効率と公正」や「人権」といった社会科特有の見方・考え方を働かせながら、考えを形成したり、新たな課題を見いだしたりする姿も見られた。これらのことから、本研究における手立ては有効であり、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながったと考えられる。

一方で、アンケート調査エ・カから、家庭や地域社会へと学びを広げる力は十分に育っていないと考えられる。身近なできごとが学習した内容と関係しているとは、捉えているものの、自分事にはなっていないと考えられる。実際には、保護者や周囲の人との対話、ニュース等を通じて学びを社会へと接続し、自分の考えを深める姿は限定的であった。したがって、学校での学習について「何のために学ぶのか」を周囲の人とともに考えていくことが今後の課題である。

(2) 田川郡社会科部会としての協議

①アンケート結果 (対象: 6校 346人)

アンケート項目	単元前 (%)	単元後 (%)
ア 「何をするのか」「何を学ぶのか」「何が大切か」などの見通しをもって取り組んでいるか	91	100
イ 学習したことを振り返り「次は～しよう」「～を学びたい」と考えることはありますか	78	85
ウ 学習内容について、友人と話し合う中で「そんな考えもあるんだ」と思うことはありますか	92	92
エ 学習内容について、保護者の方や周囲の人と会話をする中で、「そんな考えもあるんだ」と思うことはありますか	74	69
オ ニュースやSNSなどを見て、「授業で学習したことと関係あるな」と思うことはありますか	86	83

②考察

田川郡のアンケートの集計結果では、ア・イの項目の変容から、「主体的な学び」について改善傾向であった。しかしながら、ウ～オの項目では、友人や保護者の方、周囲の人との「対話的な学び」や学校外での「深い学び」について改善したとはいえない。

また、田川郡の各学校の結果は、必ずしも同じような結果ではなかった。これらの結果をもとに、社会科部会では、各校の手立ての有効性や今後の課題について改めて協議を行っている。次年度以降も研究を継続し、改善を図っていきたい。